

そのひとに初めて会ったのは、母の形見の着物の縫い直しを依頼に行ったときだった。横須賀の山間にある仕事場の、使い込まれた裁ち台に、私が持参した古い大島紬拵げ、その人は言った。「新品の反物から作るのもいいですけど、古いものを新しい着物に仕立てあげるの、わたし大好きなんです」続けて、「三十年間この仕事をしていいますが、最近ますます和裁の、というか、着物の魅力にとり付かれています」と。その目を輝かせて語る彼女の話は、これまでも和服の良さを充分に理解しているつもりだった私に、着物についての新たな目を開かせてくれたのだった。

着物は決してその人、一人だけのものではない。色を変え、姿を変え何代にもわたって生きてゆく。布はやがて擦り切れ、最後に細い糸となっても、それがまた織りなおされて一枚の布へと戻る。和服にはそんな長い歴史があるということをし、これまで私は知らなかった。単なる着物リフォームというだけではすまされない息の長い、幅の広いものだったのだ。

そこで私は、和服仕立ての過程から話してもらおうことにした。

一番初めにするのは、棒芯に巻いてある一反の生地をスルスルとほどいて、長さの確認をします。そのときの緊張感は何ともいえません。布がほどける度に、ふわっと浮き上がってくる柄ゆきが楽しみ。花や格子、小紋柄などに初めて出会うときです。

新品の反物は約十三メートルほどありますが、それを袖、身頃、襟などの部分に分けるために、生地にしるし付けをします。それぞれの部分の長さを測り、しるしをつけたら次は裁断です。裁ちばさみで最初のひと裁ちを入れるときの緊張感、三十年続けてきた今も変わりません。ジャリツ、と絹地が切れるときの音は、慣れるということがないですね。もし切る位置が間違っていたらとか、まあ、間違えたことは三十年間一度もありませんが。

裁断が終わると、今度は縫う場所に印つけをします。これも絹物にはコテを使います。浴衣など綿物はヘラを使います。最後までこの印つけを頼りに縫うので、これはとても大事な作業です。

印つけはほとんどの場合、物差しを使った直線です。袖だけは、たもとの形を出す

ために、丸い金型を使って曲線をつくりませんが。コテの先端の尖った部分を使って、二センチ間隔に印を入れます。

着物の場合、一番先に作るのは両袖です。印にそって、二・五ミリ位の縫い目で、チクチクチクチクと縫います。全体を縫い終わったら、今度は仕付けです。中表に縫っていた袖を、外表に返し、縫い目の上あたりを、一目落としと行って大小の糸目を交互に出して、縫うのです。それが終わったら、今度はアイロンかけ。仕付け糸の上を、優しくアイロンで押していきます。そしてやっと袖の完成です。

鏡の前に立って、左右の袖に腕を通し、胸の前で交差させると、それだけで胸がワクワクします。何だか仕上がった着物を着た気分になります。三十年たった今も、初めて縫った浴衣の袖を通した、あの日のあの感覚を、はつきりと覚えています。

ミシンで縫ってしまえば五分もかからないのに、その何十倍もの時間をかけて、一針一針、手で縫っていく、それは大変に根気のいる作業です。でも縫いはじめると、時間の経つのを忘れていく。それほど熱中している自分に驚き、それがまた嬉しくて、また小さな針目でコツコツと縫い続ける。そんなことの繰り返しが、手縫いの面白さだと思ふのです。

和裁士の修行は、初めに浴衣を縫います。次に長襦袢を二枚、そして単衣の着物、合わせの着物と進み、成人式の振り袖や、お正月用の訪問着を縫えるようになるには、五年ほどかかりました。ちよつと乱暴に扱っただけで破れてしまいそうな繊細な絹地を、息をとめるようにして裁ち、コテで印を付け、丁寧に縫う。この一連の作業中、頭のなかでは常に、肩のあたりにはこの花がくる、そして裾にはこの葉と茎がと、出来上がった着物の全体像を思い浮かべながら、一針一針を縫い進めます。そうして時間をかけて仕上げた着物を、自分で着たとき、また誰かに着てもらったときの達成感、何と表現したらいいか。実際自分で縫ってみないと分からないと思います。

また着物は、縫い終わってすぐに着ることも出来ませんが、本当はしばらく寝かせてから着る方がいいのです。半年はおく方がいいともいう。何故かという、縫い目を落ち着かせ、身体になじむようにするためです。寝押しといって、布団の下に畳んだ着物を何日か敷いて寝るのが一番。又は箆笥の一番下段に入れておいてもいいです。

ハイテクの世の中に逆行するようですが、とにかく和裁は時間をかけ、手間をかけて仕上げます。五十センチ縫うのに、小さな針目だと三十分くらいかかるでしょう。そうして手間をかけて仕上がった着物は、着る時もまた手間をかける。肌襦袢、長襦

袴、腰ひも、伊達巻き、帯、帯揚げ、帯締めと何枚もの布と、何本ものヒモで着付け、脱いだあとまた手間をかける。衣紋掛けにかけて数日、風を通し、きちんと畳んで、たとう紙に包んで箆笥にしまう。こんな面倒に見えることも和服を着る喜びにつながると思います。

私のもう一つの楽しみは“つぎはぎ着物”を作ることです。昔、青木玉の母、幸田文について書いたエッセイに載っていた写真が忘れられません。それは、黒っぽい布と色柄ものを斜めに接ぎ合わせた着物でした。それが何とも鮮やかで美しく、私も母の黒い紋付きをほどこいて、やはり母が若いころ着ていた小花模様の小紋のすり切れない部分を切り取って、一枚の着物に仕立てました。

今では私の教室でも、この方法を教えて喜ばれています。ある生徒さんは、お祖父さんの帯とお祖母さんの羽織を使ってオシャレな名古屋帯を作りました。またある生徒さんは、自分の成人式の着物を、お孫さんの七五三の着物に仕立て、残りの布を使ってお嬢さんの長襦袢を作りました。

着物地は最初に裁つ部分が大きいので、何十年たっても使えます。たとえ汚れたり擦り切れたりしても、よいところをとって、繋ぎ合わせて“新しい一反”を作ればよいのです。

そして和裁は、家族の歴史を作ってくれます。私も亡くなった父の紬をほどこいて母の大島と貼り合わせて、大胆な柄の道行きコートを作りました。父の紬は大正時代に祖父が着ていたものです。

そして数十年後、この道行きコートが擦り切れると、次には和裁を習っている姪が、傷んでいない部分を切り取って、名古屋帯にするかもしれない。そしてその姪の子がまた、さらに小さくなった布を使って、巾着袋を作るかもしれない。やがて巾着袋は可愛いお手玉になっているかもしれない……。

そんな風に、何十年も先のことを想像させてくれる“着物”を作る仕事“和裁”は、私にとっては天職なのです。

彼女の話を聞いて、私は日本人に生まれてつくづくよかったと思った。明治生まれの母が残した着物が、昭和を超え平成まで生きている。着物としての務めを終えてもまだまだ生き続ける母の着物。私の娘や孫が……と考えただけで嬉しくなるのだ。